海の見える芝生で　曽野綾子

海の見える芝生で

曽野綾子

新潮社

海の見える芝生で

300円

1961・2・20　印刷

1961・2・28　発行

曽野綾子　著者

佐藤亮一　発行者

新潮社　発行所

東京都新宿区矢来町71　Tel. 341・7111
振替東京808

新宿加藤製本　二光印刷

Ayako Sono　1961 ©

Printed in Japan.

落丁本はおとりかえいたします。

海の見える芝生で　5
一日一善　41
冬の油虫　63
金沢八景　85
むなつき坂　113
悪運　149
音絶えた夜　193
蒼ざめた日曜日　205

题字　町　春草

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

海の見える芝生で

曽野綾子創作集

海の見える芝生で

四月一日、土曜日。

湘南地方では桜は満開である。

海に面したこのホテルの芝生には、三人の外国人の兄弟が遊んでいた。長男は十歳位、金髪で、脚がおそろしく長かった。次男は三つ半位、やせていて髪の毛は灰色をしている。三男はまだ恐らくはお誕生前に違いないのにおむつでふくらんだお尻をつき出しながら、ロールハムのように太いくびれのついたたくましい脚でその辺を歩き廻っている。転んでも泣かず、母の名を呼びもしない。彼は既に自分の人生をその短い両脚でしっかり支えているようだった。

彼らの母は少し離れた躑躅（つつじ）の植えこみの前のベンチで編物をしていた。金髪の頬のやせた女で早くも水色の夏服を着ている。彼女は丸い大きなお腹を春の陽に温めていた。彼女はもうそこで何時間も、生まれて来る子供のための編物をし続けていた。三人の子供達の方を、彼女は滅多にふりかえらない。

芝生にはもう一人、日本人の娘がいた。背の高い、二重瞼のくっきりした美しい娘で、やや

赤ちゃけた髪が、手入れのゆきとどいたウェーヴを見せてうなじを覆っていた。一流の美容院へ、少なくとも週に一度は通っていることを示しているような髪だった。

彼女はさっきから芝生におかれているテーブルの一つに坐って、手紙を書いていた。ペンは上から下へではなく左から右へと動いている。手の動き具合からみて、それは横文字であった。水色の薄い便箋はもう三枚目である。何枚も書き損じてはいるらしいが、それはかなりの語学力のあることを示していた。

彼女は時々眼をあげて三人の男の子たちや、散歩しに庭へ出て来る泊り客の人々を心もち煩しそうにみていたが、すぐにまた手紙を書くことに没頭していた。

やがて彼女は書き終り、何度も読み返した挙句、同じく水色の封筒を出して宛名を書き始めた。それは航空便用の封筒である。

彼女が封筒にちゃんと封をし終った時、二階の部屋からそれをじっと見ていた野口華子は、自分がその長文の手紙を書き上げたほどに、ほっとした。

彼女はその娘を満更知らない訳ではなかった。

野口華子がほっとして、窓際のソファから身を起した時である。部屋の電話のベルが鳴った。

「東京からでございます。」

交換手が言った。

家が火事ででも焼けたのだろうか、と華子は思った。次の瞬間考えたことは、夫が自動車か飛行機の事故にでも会って、その電報が自宅に入ったのではないか、ということだった。どちらも素朴な心配の仕方であった。夫は今、バンコックにおり、今迄、外地へ出ると必ずそうした事故に会うという運命をもっていた。一度はアメリカでのった飛行機が胴体着陸をしてしかも無事だった。二度目はシンガポールの郊外で彼の自動車が並木に激突した。マレイ人の運転手は体中にガラスの破片を浴び、後の座席にいた彼はほうり出されて頭をうった。もう少しうちどころが悪ければ廃人同様になるところだった。しかし七針縫った頭の傷は、髪の中にかくれて見えず、日本へ帰った時彼はこともなげに妻に言ったものであった。

「二度あることは三度あると言うからね。今度は危いかも知れない。あんたは確かに私と一緒に旅行しない方がいいな。うまくすれば、天下晴れて後家さんになれるかも知れない」

野口夫妻は、もう大分前から、物質面以外に夫婦の責任を果し合っていなかった。他にも夫婦らしい要素がないことはなかったが、それは気紛れで利己的なものであった。二人が別れないでいたのは、さし当り離婚する必要がないからにすぎなかった。離婚届に判をおさなくても、二人は充分に自由だった訳である。夫には世界中どこにいても常に愛くるしい女友達が出来、野口華子もその代償として自由を確約されていた。

電話の声は、しかし東京の家の女中ではなく、きき覚えのある坂部俊明からのものだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「お宅へ電話したら、そちらだということでしたから」
「昨晩ふと思いついて来てしまったの」
「これからちょっと伺いたいんです」
「ここまで？」
「ええ」
華子は一瞬眉をひそめた。折角東京を離れたのだから自分だけでいたかったのである。
「明日は東京へ帰るのよ、それからじゃいけません？」
「出来るだけ早く御相談したいことがあるんです。僕一人では決めかねることがあって早急にお会いしたいんです」
「それじゃ、どうぞ、いらして」

坂部俊明と会ったのは四ヵ月前である。野口氏がバンコックにたった直後であった。華子は盲腸炎をおこしてB大の附属病院へ入院して手術を受けた。手術の経過そのものはよかったのだが、前から時々悪かった腎臓が又悪化した。そして華子の入院は意外に長びくことになった。
暮もおしつまった頃に入院したのでお正月にかかってしまい、病院は開店休業の形になった。大病院というものはその点無責任なものだ。休日には病気も休んでくれると思ってでもい

るのか、医師達は当直を残してごっそりいなくなってしまう。

華子は夫から来た見舞の手紙を何度かくり返して読んだ。夫の手紙が懐かしいからではなく、絵葉書の写真が夢をさそったからである。それは鐘を伏せたような形で有名な「暁の寺」が黄色の夕陽の中にうかんでいる風景であった。

夫の文面はかなり親切なものではあった。彼は自分がいなくなってすぐ、そんな災難に会うとは気の毒をした。自分が日本にいたなら、少しは手伝いも出来たろうに、と述べ、くれぐれも大切にするように、とやや他人行儀な言葉で結んであった。

夫が殆んど妻の病気を気にしてはいないのは明らかであった。彼は華子が死んでも別に気にはしないだろう。丁度、華子が電報や電話を時ならぬ時に受けると、真先に野口が外国で死んだのではなかろうか、と思うのと同じ程度に、野口も華子が死ぬのを期待しているのかも知れなかった。期待しているというのは少し不正確かも知れない。ハガキにも書いてある通り、本当にもし日本にいたなら、野口はどんな第一級看護婦も及ばないほど、至れり尽せりの看護を妻のためにする男であった。

その正月の間に、華子は坂部という若い内科の医師と急速に親しくなった。坂部はまだ三十にはならなかったが、独身で、若くみえた。華子とは七つほどの年の開きがあった。

事のおこりは、華子が夫あてに書きかけた手紙を、彼女が眠っている間に部屋に入って来た坂部が見たことである。いや、華子はまだはっきりと坂部に確かめてみたことはないのだが、

恐らく彼は読んだに違いないと思われた。

その手紙は、夫にあてた年賀状であった。

「今年も、無事で御縁がありましたらよろしくお願い致します。」という書出しである。

「今の若い夫婦なら、もうとっくにこんな偽善的な結婚生活など捨てて、さっぱりするのでしょうが、あなたも私も、その偽善的な所に妙な安定を覚えて暮しています。二人とも度はずれに利己的で怠惰なのでしょう。しかしどちらかが、本当に命を賭けた恋でもしたら（そんな気づかい、いや希望は滅多になさそうに思われますけれど）お互いにその時は奮起して、今までの惰性的な生活を解消しなければならないのではないかと年頭に当り決心を新たにしようとしています。」

そこ迄書いて、華子は書きかけの手紙を枕許のサイド・テーブルの上にほうり出したまま横になった。病気以来、怠け癖がついてしまって、根をつめて何かをする、ということが出来ない。

その儘彼女は一時間ばかり眠った。目が覚めて暫くすると坂部医師が入って来た。

「先刻ちょっと来てみたんですが、眠っていられたようだから」

手紙を見られたかも知れない、と華子は思った。別に隠さなければ具合の悪い手紙でもない。しかし変化はてきめんに坂部の方に現われた。男の方がこういう面では正直なのかも知れない。正月で病院の仕事が正常に行なわれていなかった故もある。彼は珍しく病室の椅子に坐

りこんで煙草を吸った。病人が起き上って、ライターをつけてやった。
好意のあらわし方は単純に、まず簡単な身の上話から始まる。
坂部俊明の父は、東京の東横線沿線でなかなか評判のいい開業医であった。息子二人は共に東大を出て、俊明の長兄は東大の法医学教室にいた。次男の彼が、ゆくゆくは父の跡をつぐことになっている。華子も問われるままに、夫が勤め先の商社のバンコック支店長になって赴任しているという話をした。
「どうして奥さんは一緒に行かれなかったんです」
「だって、ひどいところだっていいますもの。あちらは。手をふりまわすと、蚊と蠅がざらざら当るんだっていう話ですわ」
「まさか、そんなこともないでしょう」
蚊と蠅では、坂部の問いに対する答えにはなっていないらしかった。しかしそれ以上のことは、会ってからまだ一週間ほどにしかならないアカの他人に説明する必要はない、と華子は思った。
一月の十日に華子は退院した。バンコックから、といっても夫からではなく、知人の銀行員の夫人からの一通の手紙が家に待っていた。
それによると、夫はつい先日までヨーロッパ人とタイ人との混血の音楽家（ピアニスト）と大変親しくしていたのだが、その女はなかなか野心のある女で、野口氏を踏台にして、いつか日本へ音楽の勉

強に来るつもりでいたらしい。勿論、ピアニストとは言っても、タイの楽壇というのは、あってなきが如きものだから、彼女の音楽の技術もたかが知れたもので、その点は野口氏も最初からあまり問題にしてはいなかったらしいが、最近彼女は、アメリカ人の或る興行師と知り合いになり、日本に行くかアメリカへ行くかとなると、勿論アメリカへ行った方がマーケットとして有利だと思ったらしく俄かに野口氏を袖にし始めた。

それ迄、何か集りがある毎に必ず彼女と一緒だった野口氏が、クリスマスのパーティには珍しく一人で現われ、そして心なしか随分しょんぼりと淋しそうにしていた。ピアニストの方は、アメリカの興行師と手を組んでオリエンタル・ホテルの晩餐会に現われ、その噂はぱっと拡がったから、野口氏の耳にもすぐ入ったことと思う。

今度こそ、これに少しこりて、奥さまのこともお考えになるのではないかと、主人ともども話し合っている、と手紙には書いてあった。

御心配は感謝すべきだろうが、もしこの手紙が事実とすれば、事は誠に野口という人間の思惑通りに運んでいるのである。野口というのは貪欲な男で、女でありさえすれば妻以外どれでもかまわなかったが、一つところで長々と深い関係をもつのは好まなかった。勿論、彼はいつも女友達なしではいられなかったが、ふられ方も堂に入っており、その上ふられることをなかなか趣味的にも好んでいた。それだからこそ、彼は外地にいてもかつて女のことで悶着をおこしたことは一度もなくて済んで来ているのである。

退院して来てから、大分体もしゃんとしたように感じたので、華子は或る日近所を散歩した。厳しい寒風の吹く中を、爽快な散歩であった。むし暑いバンコックのホテルで、毎晩体をもてあましているに違いない野口周造という中年の男を想う時、この冬の日の散歩は一きわ印象的であった。

しかし運の悪い時には悪いことが重なるもので、それがきっかけで風邪をひいた。かかりつけの医者はあるのだが、華子は坂部俊明に電話をかけた。それこそ夫がいればいいのだが、そうでない時に病気をしたら、気のきかない女中相手に寝ているのは実に心細い。それ位なら一応は完全看護をうたっている病院に後もどりした方がましなので、その為にはあらかじめ、坂部に往診をしてもらっておいた方が得策であった。

坂部はすぐにやって来た。彼の診断によると、華子の熱は気管支炎のためであった。今年の気管支炎には悪質なのがあって、何度もぶり返すのがあるから用心した方がいい、と彼は言った。病院の方はすぐには入院という訳にはいかないらしいのである。坂部は華子の具合を気にしながらもなかなか帰ろうとしなかった。そして華子も強いて坂部を追い返そうとは思わなかった。坂部と話しているのが楽しかったからではない。只病気の時に、医者が傍にいてくれるという最上の安心感があったのである。十時近く帰る時になって、坂部は病人の手をとり、高熱のために半睡状態の華子を烈しい接吻で覆った。

驚いたことに、坂部にとってその接吻は非常に真剣なものだったということが後になってわ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com